
【可能性】 プロローグ

双黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【可能性】 プロローグ

【Nコード】

N0659Q

【作者名】

双黒

【あらすじ】

初心者が思いつきで書いてますので、そこはご了承ください

僕の可能性

普通の人間の日常には、変化はない。それは僕がこの15年間生きてきて学習したこと。たぶんこれから、もしかしたら死ぬまで変化はなく、ただ年をとっていくだけかもしれない。そんなことを昨日まで考えていた。

だが今日。彼女に出会って、僕の日常は変わった。

僕の学校は都心から少し離れた、小高い山の上にある。なんの特徴もない公立高校。しいて上げれば、坂道を上がって通学しないといけないくらいだ。僕はいつも都心電車でもよりの駅まで行き、そこからは徒歩で通学する。

「ふう……」

朝は通勤ラッシュのせいか、電車が満員。駅から降りると溜息は当たり前のように出た。電車内にはちらほらと同じ学校、水城高校の制服を着た生徒もいる。ブレザーにネクタイとこれもまたよく見る制服。僕はこの普通の学校が好きだった。なにより自分とよく似ていたし、とても馴染みやすい。

ただ僕には悩みがある。それは友達と呼べる友達がいないのだ。僕は自分で言うのもなんだが、普通の容姿だ。確かに学校ではクラスメイト達と多少は話すが、休日まで遊んだことはない。

「はぁ……」

また溜息をつく。結局自分には普通が似合ってるのだと、自覚したからだ。

僕の可能性（後書き）

ありがとうございます
引き続きお楽しみください

【可能性】 とある放課後

6時限目のチャイムが鳴ると僕はいつものように荷物をまとめて教室から出ていく。クラスメイト達は部活動にでるため部室に走って行く者もいれば、教室でのんびりと友達としゃべったりしている人も。それを横目に僕は教室から出ていく。学校を出て長い下り坂を降り、もよりの駅へ。腕時計を見ると16時30分を指していた。

「少し早く着きすぎたなあ」

そんな独り言をつぶやき、改札を通り、いつもの4番線に。ホームには朝同様帰宅をしている人達がいたが、朝ほど混んではない。なんとなくほっとする。すると突然ホームに叫び声が……

「おい！！！！誰か来てくれ！人が落ちた！」

中年の会社員がそう言うて線路を指をさす。僕の体はなぜか自然とホームの段差に引つ張られ、高さ2メートル下をみた。そこには僕と同じ位年齢の女の子が落ちてうずくまっている。顔はよく見えないうが、足首をひねってとても痛そうだ。ホームはパニック状態だった。でも僕はなぜかその子から目が離せない。プオオオオオオー！

—————！

電車が来ていることに僕は気づかなかった。このままでは女の子が死んでしまう。しかし以前駅員はおるか誰もその子を助けようとしていない。電車は汽笛を鳴らしながらブレーキをかけている。だがこのままでは……

いきなり時間が止まった。灰色の世界。

「なんだ……これ!？」

僕は思わず目を擦る。それでも変わらない。僕はパニック状態だった。自分でもわかるぐらいに。

そして僕の目の前に、僕に似ている……いや僕が2人いた。そして左の僕がしゃべりだす。

「このままこの子を助けないで、見殺しにするか」

そして右の僕がしゃべりだす

「それとも助けるか」

そして2人の僕が口を合わせてこういった。

「どっちがいい？」

5秒の沈黙。僕は当然のように、答えた。

「助けるよ」

そういった瞬間灰色の世界は色を取り戻し、ホームのパニックの聲が聞こえた。電車は女の子に近づいて来る。

「今助けるから!!!」

僕はそう叫んで、ホームから飛び降りた。走って女の子の方へ向かう。電車は近付いてくる。僕は走る。30メートル。20メートル。10メートル。5メートル。1メートル!そして刹那……電車はホームに止まった。僕は女の子を抱き抱えて、電車の横に倒れていた。

「だ、大丈夫？」

そういつて腕の中の女の子に問う。きれいな黒の髪。ロングストレートの髪の毛。それはすこし砂で汚れていた。女の子は声を発せず、ただ頷く。しかし女の子は僕の腕の中で震えていた。どうしていいのかわからない。とにかく今はホームの上にあがるのが優先だと思つて、逆側のホームに行く。もちろん女の子はおんぶをしてあげて、だ。

「大丈夫ですか!？」

「僕もこの子も大丈夫です!梯子をおろしてください!」

「わ、わかりました!」

駅員はすぐに梯子をもつてきた。彼女は以前震えていたので僕はおぶったまま梯子を上った。

ホームにあがると拍手で迎えられた。ホームにいた人たちが僕に拍手をしてくれていたのだ。でも僕はそれが少しうれしくはなかった。あたりまえのことをしたのだからとなぜか思つたからだ。

「すいません。この子まだ恐怖で震えてるんです。待合室あります

か？」

「は、はい！こちらに！」

駅員はそのまま僕たちを駅の待合室に誘導してくれた。

待合室に着き、とりあえずこの子をイスに座らせ、駅員は部屋から出ていった。どうやら駅長に報告にいくそうだ。

「もう大丈夫だよ？」

「・・・」

彼女はコクンと頷き、顔を上げる。手で多少隠れた顔をみて、とてもきれいな顔立ちだと思った。しかし今は泣いていて、目の下が多少赤かった。

「あ、ありがとう、ごさい、ます」

彼女は少し泣きながらそういつてきた。

「はい。ハンカチ」

そういつて僕はハンカチを差し出した。

「ありがとうございます・・・」

そういつて彼女に触れた瞬間ッ。僕の脳裏に衝撃が走る。

【可能性】 不思議な少女

僕はなぜか白と黒の半分に分けられた世界にいた。

「いい判断だね」

白の方にはあの右側の僕がいた。

「いい判断だね」

黒の方にはあの左側の僕がいた。

「君達は、、、いったいなんだ？」

僕はひどく冷静にそう訪ねた。右側の僕は答えた。

「君は自分をすごく普通だとおもってるね」

「君は普通じゃない可能性があるよ」

僕はこの二人の僕が何を言っているのかわからない。まだこの世界がなんなのかがまったくわからない。なぜ僕がこんなことに、なぜ？

「君には可能性がある。それを頭に入れておいて」

そういつて二人の僕は徐々に消えていく。

「ま、まってよ！どうゆうこと？！」

そういつて二人を止めようと腕を伸ばしたが、空気を裂いただけだった。

「いったい、なんなんだッ！！！」

そう叫んだが、いまは白黒の世界に響いただけだった……

「だ、大丈夫ですか？」

僕は倒れていたらしく、目をあけると天井と僕が助けた彼女がいた。彼女はとても心配そうな顔をしている。

「うん。大丈夫」

そういつて立ち上がろうとしたが、足が重たい。そして頭が痛かった。しかし彼女に手助けをしてもらうのも申し訳なかったし、なに

しろ手に触れたくはなかった。またあの世界に引きづり込まれてしまうとおもったから。僕は壁をつかってゆつくりと立ち上がった。

「そういえば、お名前を聞いてませんでした。あなたは？」

頭を少し抑えながら、僕は答えた。

すぎはら・しゅんた
「杉原俊太だよ。君は？」

僕はそういつて、イスに向って歩き、イスに座る。

彼女は少しうつむいて答えた。

「私は・・・名前がありません」

「え？」

僕は一瞬その言葉を疑った。まさか、そんなことがあるのかと。

「・・・親は？」

少しうつむいた顔がまた更に、うつむく。

「いません」

「嘘だろ？」

「嘘じゃないんです、私は・・・私は・・・」

彼女はついに泣きだしてしまった。

「ご、ごめん！」

「・・・私が悪いんです！・・・私が・・・」

結局僕は泣いている彼女を見ていることしかできなかった。すると駅員が待合室に入ってきた。

「君たち、今日はもう帰っていいそうだよ。これを。」

そういつて駅員は僕に封筒を渡してきた。

「彼女を助けたお礼。ほんとに事故にならなくて、よかった。ありがとう」

そういつて駅員は深々と頭を下げた。

「そんな、お礼なんて！！いいですって！」

僕はお金を返そうとしたが駅員はそれを拒んだ。

「お願ですからもらってください。俺は君に感動しました。自分が死ぬかもしれないのに、彼女を助けて・・・俺には絶対できないことを・・・すいません。これはと私と駅長の気持ちです。どうか

受け取ってください」

僕ははじめて人に感謝された。日頃から何も行動に移さない僕は、リーダーとして先頭に立ったこともなく、ただ影が薄かったのだから。

「それでは」

そういつて駅員は去っていった。僕は目を彼女に移した。

「ごめん！立てる？」

彼女はこう言った。

「すいません……」

「とりあえず、帰ろうよ！」

僕はそう言つて、彼女をおんぶした。そして彼女は僕の背中ですう言つた。

「すいません……」

僕にはいまの状況がまったく理解できなかった。この彼女。そして二人の僕。まさかこんなことがありえるなんて、思ってもいなかった。僕はただはやく家に帰つて……寝たかった。

【可能性】 みなれた光景、新たな世界（前書き）

展開は急に進んでいく小説です

【可能性】 みなれた光景、新たな世界

僕は彼女を背負ったまま、家まで歩く。いつも帰っている道もいつもとは違うのだ。それがなぜだか僕にはよく分からない。ただ感覚として、いやこれを人間の直感というものかもしれない。五感を超えた・・・これ以上は言語ではうまく表現はできなかった。

「すう・・・」

彼女は僕の背中では寝ていた。あんなことがあったのだ。疲れて当然だろう。僕も疲れてるんだけどなあ、などと考えていたらいつのまには家についていた。

僕には両親がいるが、二人とも海外に住んでいる。両親はどちらもデザイナーで世界を飛び回っているようだ。僕は一人で家にいることなんて慣れていないし、逆に親がいらないほうが楽といえば楽だ。家の外見は結構大きい。この一帯はそういう大きな家ばかりでそんなに大きくは感じないが、普通の家の2倍はある。僕は玄関の力ギを開けた。

「とにかく、この子を寝かせないと」

そういつて、奥のリビングのソファに彼女をおろした。いまだ眠っている彼女の顔はとても綺麗だった。時間をみるともう8時を指していた。流石にこの時間に何も食べていないとお腹が減ってしまった。僕は手早く遅い夕ごはんを作った。もちろん彼女の分もだ。そのおいしい匂いに誘われたのか彼女が目覚めます

「いい匂い・・・ここは？」

「僕の家だよ」

「ええ！？いいんですか？！親とか！！」

「大丈夫だよ、実は親は海外にいて一人暮らしなんだ」

そういつてフライパンで焼いている肉をお皿にうつす。料理はおてのものだった僕は手早く食事の用意を済ませた。その間はずっと彼女はこちらを見ていたが、目を合わせると顔を赤らめて目をそらし

た。なんか青春って感じ。ああ僕いま青春真っ只中か。

「できたよ。食べよ」

「いいんですか!？」

「いいから。早く座って」

彼女をイスへと促す。

「いただきます。」

彼女はそう言っパクパクとごはんを食べる。そうとうお腹が減っていたらしい。僕もゆっくりとごはんを口にする。

「今日うちに泊まっていきなよ」

僕がそんなことを口にする则彼女は顔を真っ赤にした。

「い、いやそれは申し訳ないです!!」

「君家ないでしょ？」

「う・・・はい」

「んじゃ隣の部屋に布団用意しとくよ」

僕はそう言っお茶をすすり、食器を重ねた。

「ああ。心配しないで。僕は二階で寝るから一階でのんびりしていよ」

「あ・・・はい・・・」

そういつて彼女はうつむく。僕は少々気を遣いすぎるかもしれないといま気づく。

「ホントにいいんでしょうか？」

そんなことを彼女は口にする。

「大丈夫。僕はだいたい一人だから、その人が増えてうれしいよ」
本心だった。これほど人が頼れるというか、家に僕意外に人がいるなんて初めてだったからともうれしかった。なにしろ小学生の時から一人で過ごしてきて、友達を家に呼んだこともない。そういう話にもならなかった。ただ僕はいつもなにもない家の中で食と寝ることしかしてなかったのだから。でも今日の僕は違った。なにか変った気がしたんだ。僕のなかで何かが、確かに動き始めてる。彼女に出会っただけにもかも変わった気がするのだ。

「僕今日は疲れたからもう寝るよ。布団は敷いておくから適当に寝てね。明日は土曜日だしどこかに行こう」

「あ、はい！ありがとう」

彼女も楽しそうだった。僕はとてもうれしくなった。僕から遊びに誘うなんて初めてだ。それにしても急展開すぎるけど、確かに感じた。

僕も彼女もいま現状で頼れるのはお互いだったことを……

【可能性】 みなれた光景、新たな世界（後書き）

すいません。こんかいは恋愛模様でしたが、恋愛小説じゃありません。これから真面目な話に入っていきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0659q/>

【可能性】 プロローグ

2011年1月16日06時36分発行